# 花束と恋心

ふじやす　ゆあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
花束と恋心

【Ｎコード】
Ｎ６８７１Ｆ

【作者名】
ふじやす　ゆあ

【あらすじ】
大人の女の人に恋をしてしまったとある少年のお話。

# 花屋の彼女

からん。

明るい音が、客を迎える。

酔ってしまいそうな甘い花の香りが客を柔らかに包む。

「いらしゃいませ」

おそらく接客向きの性格ではないであろう彼女は、にこりともせず客にそう告げた。

しかし、目線だけは真っ直ぐに客に向けられている。

凛とした強い目。明らかに客用ではない、どちらかというと喧嘩相手に投げかけるようなその視線に客は何かを射抜かれた、気がした。

前髪もろとも後ろに束ねられた黒髪。

色白で、端正な顔立ち。

背丈は割りと高め。

全体的に線が細い。

客は、彼女から目を離せなくなっていた。

「何か？」

ふと気がつくと、彼女は客に訝しげな目線を突き刺していた。

「い、や、なんでも・・・・ないです」

客は声を上ずらせて応えた。
３６０度何処から見ても花屋には見えないであろう彼女の一睨みは客をすくみあがらせるには十分だった。

客は、あわてて目当ての花を探し始めた。案の定、すぐに見つかったようで花を片手に会計へと向かった。

カウンターに置かれた花を見て、彼女は小さく微笑んだ。
その花はしゃんと背筋を伸ばし、まぶしいほどの純白の花びらを見に纏っていた。

「好きなの？この花」

彼女の、綺麗過ぎる笑顔に、客は思わず息を呑んだ。
先程までの彼女の痛いほどの目線はどこへやら、だった。
ああ、この人は花屋なんだな、客は実感した。
そして、この世には【一目惚れ】が本当に存在する事を身をもって体感したのだった。

「好き、です。」

小さな声で、客は応えた。

彼女は、客にそう、とまた笑って
「私も好きなの」　そう告げた。

彼女の言葉に、客は首まで真っ赤に染めてうつむいてしまった。

彼女は客の様子など気にもせずに

「贈り物ですか？」

いらっしゃいませ、よりも幾分柔らかい声で問いた。

「はい」

客の応えに頷くと、彼女は手馴れた様子で花を包みだした。

彼女は、客に花の値段を告げた。
客は財布からその値段分を取り出し、彼女に渡した。
それと引き換えに、花が客に手渡される。

「あの！」

突然、客が顔を上げた。

「はい？」

彼女が先を促す。

「この花、受け取ってください！」

そういって、客は先程買ったユリの花を彼女に差し出した。

彼女は驚いたように目を丸くした。
が、すぐに持ち直し

「そういうのはね、自分で稼げるようになってからやりなさい、坊や」

笑って、そういった。

学生服に身を包んだ彼は、先程から赤かった顔をさらに赤くして、店をとびだした。

# 教室の彼

冬の朝の空気は凍っている。

秋元茅花（あきもとつばな）は白い息を吐きながら一人歩いていた。

茅花は、冬が好きではない。

寒いのが苦手なのだ。

朝は寒すぎて布団から出られなくなる。

そのため毎朝遅刻ぎりぎりになってしまい、下手をすると寝癖を付けたまま学校へ向かうはめになってしまう。

だけど、今日はそんな寒ささえも愛しい。

どうしてか。

理由は、彼女の数メートル先の背中にあった。

茅花は、その背中の持ち主が好きだった。

それはもう、背中を見るだけで疎ましいはずの寒さにさえ愛しさを感じてしまうほど。

彼の名は森川蒼惟（もりかわあおい）。

蒼惟と茅花はお互いに中学二年生。

一年生のときから同じクラスだ。

とはいっても二人の通う中学校は田舎なので
クラスが同じになる確率はとても高い。

正直言って、彼らの中学校ではクラスのわけ隔てなく大概皆仲がいい。

だが、二人ともどちらかというと内向的な性格のため
互いに話した事はあまりない。

このときばかりは茅花は自分の性格を呪った。

茅花には年の離れた姉が一人いるのだが、彼女は茅花と正反対の社交的な性格だ。そのため、友人も多かった。

茅花はそんな姉が大好きなのだが、
人を惹きつける彼女の性格を羨んだことはなかった。

姉の性格は素敵だが、
茅花にも茅花にしかない長所がある。

そう思って今まで生きてきた。

勿論今でも頭ではそうわかっているのだが、
同じ中学校に通い同じクラスで毎日を送っている好きな人に
ろくに話しかける事すら出来ないということはとても情けないよう

な気がしてくるのだ。

社交的な姉を持っているから尚のこと。

毎日、挨拶を交わす事すら出来ずに
やきもきした心を抱えながら席に着くのだった。

今日も例に漏れず、挨拶すら出来なかった。

茅花は友人に挨拶をし、
肩を落としながら席に着いた。そして

明日こそは、

きっと果たせないであろう約束を心の中でそっと呟いた。

# 鞄のあいつ

「蒼惟、これ」

あんたの学校のよね、
そう言いながら乃葵(のぎ)は学生かばんを蒼惟に手渡した。

「そうだけど。どうしたの、これ」

受け取って、興味なさげに、でも一応形だけとでも言いたそうな様子で蒼惟は聞いた。

「今日のお客さんがね、これ忘れて帰っちゃって。」

花屋にかばんを忘れていくなんて間抜けにも程がある

そう思いつつ蒼惟はふぅんと相槌をうった。

「で？」

自分にどうして欲しいのか、
そう言う意味を込めて蒼惟はたずねた。

「よろしく」

乃葵はひらひらと手を振って蒼惟に背を向けた。

「何で俺が・・・・・」

文句を言いかけながら、かばんを押し戻そうとするとその先には鬼の目があった。

「いいじゃない、おんなじ学校なんだし。それにほら姉さんには仕事がある、よね？」

にっこりと口の端を吊り上げ、笑った形にしてはいるが氷点下の眼差しの所為で巧く完成できていない笑顔を添えて乃葵は言った。

蒼惟は、この笑顔に込められた意味を身をもって知っていた。逆らうとどんな目に遭うかなどは考えるだけで吐き気を催すほどだ。

「任せて、姉さん」

そのため蒼惟は大変不本意ながら姉の頼みごと、もとい命令に笑顔で応じるしかなくなった。

しぶしぶとかばんを二つばかり抱えながら、蒼惟は自室への階段を上った。

そこで、二つ目のかばんがやけに軽い事に気づいた。

きっと教科書類を全て教室に置きっぱなしにしているのだろう。

（中学生のうちから置き勉だなんてけしからん奴だ。洋みたいだな。）

蒼惟は親友の顔を思い浮かべた。

ついでにその親友が言っていた事を思い出した。

「あ」

俺、今日母さんに頼まれて花買いに行かなきゃなんねーんだわ

「アイツか」

面倒事に巻き込みやがってあのバカ、
ぼそりと呟いて自室のベッドに親友のものだと思われるかばんを投げ出した。

# 通学路に鞄

「あおいー！」

冷たい空気の中を白い息を吐きながら身を縮めて歩いていた蒼惟に
殆ど叫びながら一人の少年がタックルをかました。

二つの鞄を両手に抱えながら歩いていた蒼惟は突っ込んできた少年
ごと
冷たい地面に突っ伏した。

「ばっ、重い！降りろ！」

うへへ、と笑いながらタックルをかました少年は
よっこらしょ、と蒼惟の上から身体を退けた。

「なー蒼惟、」

少年は空いている両の手を前後にぶらぶらと揺らしながら
間延びした声で蒼惟に問いかける。

「なんでかばん二つも持ってんのさ」

少年の言葉に
文字通り蒼惟はピクリと反応した。

蒼惟はむくりと立ち上がったかと思うと
片方の鞄をそっと地面に置き、
もう一方の鞄はしっかりと掴んだまま
鞄を持っているほうの手で少年に向かって円を描くように思いっきり振りかぶった。

そのまま蒼惟は流れるように掴んでいた鞄の持ち手を離した。

当然鞄は少年に向かって流れてゆく。

うげっ、

少年はうめき声を上げて飛んできた鞄を腹に受け止めた。

「お前の鞄だよ」

はあ
とおおげさにため息を吐いて
蒼惟は自分の鞄を拾い上げる。

少年――崎谷洋(さきたによう)はぱちくりと瞬きをして
鞄と蒼惟に目を向けた。

「俺蒼惟にかばん貸してたっけ？」

心底不思議そうな表情で、洋は首をかしげた。

蒼惟は
はあ

ともう一つため息を吐くと、
洋を置いてすたすたと歩き始めた。

「なんだよー、人のかばん借りといてその態度かよー」

洋は少し早歩きになって置いていかれないよう
蒼惟と肩を並べる。

「洋さ、」

蒼惟は横目を洋に流して切り出す。

「昨日花屋行ったろ」

再び視線を前に戻した蒼惟の言葉に
洋は目を見開いた。

「何で知ってんだよ！エスパー？」

すげー、蒼惟エスパーだったのか…
てことは、俺の考えてる事も筒抜け？

え、まじまじ？

いやーん蒼惟のスケベッ！

ひとりで身体をくねらせる洋には構わずに
蒼惟は続ける。

「で、そこに鞄を忘れてきた」

「…ああ！！」

「そして花屋は俺んちだ。」

「えぇ！？」

はぁ

本日三度目のため息を吐いて、
蒼惟はそのまますたすたと歩を進めた。

洋はなんだか状況がよく分からなくて
口をあんぐり開けたまま置き去りにされた鞄の隣に立ち尽くしていた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6871f/

花束と恋心

2010年12月29日14時46分発行